

# こぶし だより

働く障害がい者も  
**SSKW**  
働けるんだオレたちも



「新生けやきハイツ」での暮らし

## CONTENTS

- ① トピックス……………2P～3P
- ② 特集「その人らしい暮らしを求めて」……………4P～7P  
社会福祉法人こぶしの会の暮らしの場のとりくみと、バリア  
フリーケアホームの建設／新生けやきハイツスタート
- ③ アドレス・編集後記……………8P

No. 333

2009  
10



# トピックス

「ぶじの会」それぞれの現場から

セルプ・みらい

## 「きょうとされん第32回全国大会 in さいたま」

さる九月一九・二〇日、埼玉県さいたま市にて、「きょうとされん第32回全国大会 in さいたま」が開催され、こぶしの会から利用者、職員あわせて四二名が参加し、セルプ・みらいからも、利用者九名、職員八名が参加しました。きょうとされん全国大会は、利用者にとっては、全国の仲間と交流し、作業所での活動の様子や働いてお給料を得ることについてな

ど、お互いのことを知り学べる絶好の機会でもありません。また、障がい者の参加も十分考慮されており、ゲームやうたが盛りだくさんの

フォーラムや交流会もあります。

全体会では、基調報告に始まり、平和への思いが込められた松井朝子さんのパントマイムや、ベトナム戦争枯葉剤の証人グエン・ドクさんも登場し、写真家の中村梧郎氏による当時の映像の上映もあり、枯葉剤の恐ろしさやベトナム戦争の悲惨さ、生命への影響などが、生々しく伝えられました。ドクさんの講演を聞き、利用者も感じるものがあつたようです(下記、利用者の感想を参照)。

その後、利用者・職員とも各分科会に分かれ、全国の実践をレポートで学びました。「我が作業所自慢」の分科会には、三人が参加し、作業のことや、今何をやっているかを報告しました。「重度重複障害のある人への支援」の分科会では、自分では言葉が出せない利用者の方の母親からの報告があり、一時施設を離れて病院に入院しなければならなくなったものの、入院生活に不安があつたのか、施設では見られた笑顔が見られなくなったそうです。ご家族はその様子を見て、施設での生活を本人は望んでいるのだろうかと思ひ、現在では、様々なケアを受けながら、施設での生活を送っているとのことでした。

この報告を受け、利用者の望んでいる生活を実現するために、従来の施設サービスだけではなく、医療的なケアなど地域の様々な福

祉サービスを有効活用し連携をとっていくこと、本人・家族・職員が信頼関係を築いていくこと、本人と家族の「願い」や「支援への期待」を支援者が汲み取り、ひとつの力だけではなく、地域の福祉ネットワークを活用しながら実現していくことなど、現場に戻って実践に活かすヒントを得ることができました。

そして、今大会の一日目の終了直前に、「厚生労働大臣が障害者自立支援法を廃止することです!!」というビッグニュースが舞い込み、障害者福祉を「大きな運動」で変えていく大きな一歩となったことを実感しました。

以下、大会に参加した利用者の感想です。

◆ドクさんからベトナム戦争のときの枯れ葉剤のせいで、双子のベトナムさんが死んでしまったという話を聞いて、ショックでした。

(矢田さん)

◆全国大会に出席して、いろいろな人のお話を聞きました。一番私の心に残っていることは、ベトナムさんと会えたことです。障がいを持つ仲間たちが働ける共同作業所を作る夢、すごいなと思いました。

(田嶋さん)

◆たくさんの施設がお店を出していて、ぼくはカレンダー、クッキー、ストラップを買いました。「就職したいひと集まれ」の分科会に参加して、将来はパソコンを使った仕事がしたいと話しました。

(枝さん)

◆外国の戦争のお話やドクさんのお話を聞いてかわいそうな気持ちになりました。参加者の中で戦争や平和について話し合ったりもしました。他にもパントマイムのショーを見ました。全国からたくさんの方々が来ていてそれぞれ違った作業や製品を作っていて勉強になりました。

(那花さん)

(注) ベトちゃんドクちゃん

アメリカは、第二次世界大戦中に使用した爆弾の四倍近い量をベトナム戦争で落としました。枯葉作戦は一九六一年十一月に開始。

枯葉剤とは日本の除草剤のようなもので、副産物として催毒性のダイオキシンが含まれる。解放戦線の隠れ家であるジャングルに流産、農産物の汚染、食の枯渇が目的。ベトナム解放区に流産、奇形の発生が多くなったことが報道される。兄弟は下半身がなくなった結合双生児として生まれる。日本で大規模な支援活動が起こり、ベト(兄)が急性脳症を発症した際、日本に緊急移送され、来日した。その後、一九八八年、日本赤十字社支援、日本医師団が結成され、ホーチミン市に派遣され、十七時間に及ぶ分離手術が行われた。

ベトは二六歳の二〇〇六年一〇月、腎不全と肺炎の併発で死去。ドクは病院の事務員となり結婚。

ベトナム戦争後に生まれた犠牲者たち十五万人の苦痛とダイオキシンによる障害の発生は、四〇年近く経過した現在もおさまっている。

### チャレンジセンター

## H21年度県東圏域就労移行支援事業所等ネットワーク会議開催

七月二十八日(火) 県東圏域障害者就業・生活支援センター「チャレンジセンター」に於

いて第一回・県東圏域就労移行支援事業所等ネットワーク会議が開催されました。(参加事業所は圏域内福祉事業所(就労移行・就労継続・授産施設・福祉作業所等八事業所 計一五名)

第一部では「企業が考える障がい者観」というテーマで講師に有限会社真京精機 専務取締役 武田浩之様をお招きしてご講話をいただきました。会社の理念、障がい者雇用の経緯、職場定着の取り組みなど障がい者が企業で働いている現状のお話をいただきました。



景気悪化の社会状況の中、今まで障がい者の解雇は一人も行っていない。「苦しいところから逃げなければ道は広がる」と苦しい時にこそチャンスと力強く語られました。就労支援を行う職員に対しても、現状にあまえることなく、どうしたら企業に障がい者の優れている部分や障がいがあっても工夫を凝らせば働くことができるということを理解してもらうことができるか。障がい者を採用するにあたりどんな制度を利用できるか。積極的に最新の情報をキャッチし企業に説明できるような努力、勉強していかなければならない。と企業の側からの意見をいただきました。

また、授産工賃アップの秘訣として経営者の立場から「物の原価を知ること。数字に強くなること。そのための勉強をすること。無駄をなくすこと。固定観念にとらわれない発想をもつこと」が大変重要になるという経験からの貴重なアドバイスをいただきました。

第二部では「ネットワーク構築」に向けてそれぞれの事業所での一般就労状況等を報告していただきながら情報交換等を図りました。

就労支援(福祉的就労から一般就労へ)の活性化とより具体的な連携体制の構築、情報システムの共有等を今後も図っていききたいと思えます。

# その人らしい暮らしを求めて

～社会福祉法人こぶしの会の暮らしの場のとりにくみとバリアフリーケアホームの建設～

特集



## ■その人らしい暮らしの場を目指して

こぶしの会の暮らしの場の歩みは、1980年のこぶし作業所認可直後から自主的事業に取り組まれた宿泊訓練（自立生活体験）の準備期間を経て、1994年に策定された社会福祉法人こぶしの会長期整備計画に「生活施設の建設」という文字が掲げられ、こぶしの会として、はじめて暮らしの場に関しての動きが始まりました。その後、生活施設の建設のための委員会が設置され、議論を重ね、最終的に大規模な生活（入所）施設の建設でなく、小規模のグループホーム設置の道を決断しました。

その大きな理由は、「24時間、365日同じところに暮すのではなく、働く場（日中の活動の場）と生活の場は区別したい」、「人間的な生活の場にふさわしいのは、最低30人の大規模施設でなく、4～9人程度の小規模で、個室が保障できる場」、「町の中で普通に暮らす生活づくりには、大規模施設建設（広大な土地が必要）では困難」ということが「グループホームは施設建設や人員体制の制度が劣悪。安心な生活を保障するには入所施設が必要」という財政的安定性を乗り越え、「施設は、暮らしの場の役割だけでなく、ショートステイをはじめ、障がい者の地域生活を支える機能がある」ことも合わせて作りながら、「その人らしい暮らしの場」をグループホームを中心に目指していくことが確認されました。

## ■こぶしの会の暮らしの場のあゆみ

まず、平成10年8月1日、けやき作業所発足1年後に、はじめてのグループホーム「すずらんの家」（定員5名、芳賀町祖母井）、「こぶしのときわ荘」（定員4名、宇都宮市鑑山）が設置されました。通所者の家庭介護の低下により、作業所通所が困難になったり、入所施設への移行が避けられない状況が出てきて、なんとしても地域生活を維持すべく、グループホームの設置をすすめたのです。

平成13年10月1日には、3番目のグループホーム、「けやきハイツ」（定員4名、芳賀町祖母井）設置。障がいの重い障がい者の生活実習を重ねながら、その自立生活への展望をつくってきました。

平成15年10月1日には、第2けやき作業所を拠点に、「第2けやきホーム」（定員4名、芳賀町祖母井）設置。精神分野の社会資源をひろげました。

平成17年4月1日には、宇都宮地区に2つ目グループホーム「くるみ」（定員7名、

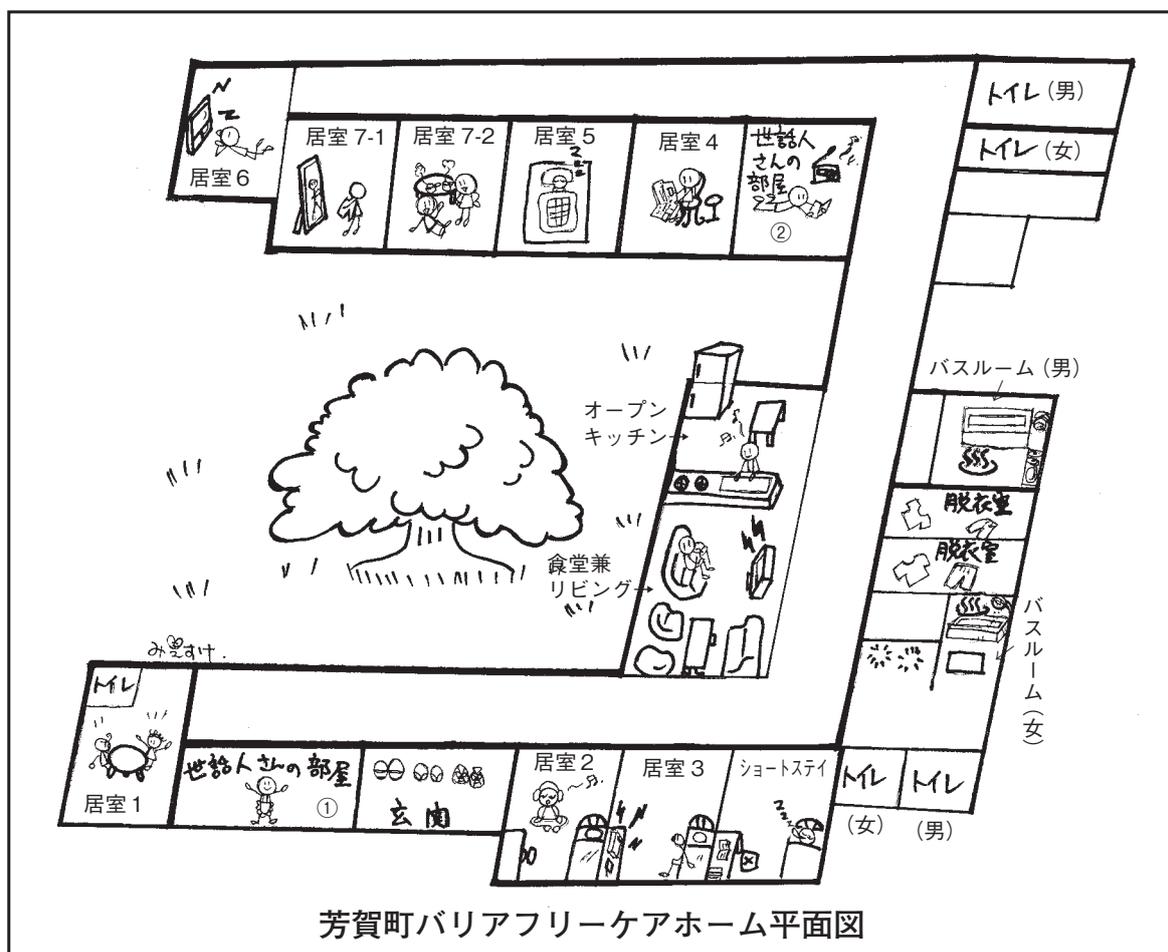
宇都宮市石井町)を設置しました。また、セルフ・みらい開所を足がかりに、真岡地区で最初のグループホーム「ぼてっと」(定員4名、真岡市長田)ができました。2つのホームともに、家主さんがグループホームのために建てていただいたものです。

その後、平成19年4月1日には、コーポ峰(定員6名、芳賀町)と牧野アパート(定員2名、芳賀町)。いずれも新たに成立した障害者自立支援法の積極面を生かしたグループホームで、コーポ峰は、既存アパートの全8室の3室をホームに指定、また、牧野アパートは、既に利用していた3世代家族のアパートの一室をグループホームに指定していただいたものです。

### ■利用者・家族の願い・バリアフリーのケアホーム建設

こぶし作業所開所30年を経て、当時からこぶしの会を支えてきた利用者、家族の暮らしは大きく様変わりしました。家族の高齢化は、貧しい障がい者福祉制度の中では、即、障がい者の暮らしの場の崩壊につながります。特に、身体に障がいある人たちの生活は厳しさもひとときわで、バリアフリーケアホームの建設は私たちの悲願でした。

かれらの暮らしが安全にできる建物作りから、医療職を含む手厚い職員体制の困難さなど社会的バリアーが大きく立ちはだかり、その建設を躊躇させてきたのです。そし



て、今年、芳賀町バリアフリーケアホーム建設プロジェクトの長く血のにじむような関係者のとりくみ（けやき作業所等家族会々長の言葉）を下地に、今回の建設に踏み切りました。

## ■すすむ暮らしの場の生活の質の高まり

この間、「けやきハイツ」や「こぶしのときわ荘」が、相次いで家主さんの大きな理解の中で、芳賀町バリアフリーに勝るとも劣らないケアホームを建設、または建設中です。暮らしの場の生活は、ハードの面で着実に質の高まりをみせています。

また、支援の中身も昨年から居住支援課を設置し、法人の横断的な協議の場で支援の中身を深め始め、すでに一部の運営は統一的に進められています。

ホームの運営は、制度の貧しさから一般的には地域の理解者に委託しているところがほとんどですが、こぶしの会では、暮らしの場づくりに法人として責任を持つという意味で建物の建設も職員雇用も法人が直接的に経営をしています。

現在、こぶしの会のホームは8ヶ所、利用者数32人、職員数17名（臨時・パート含）に上り、1つの入所施設の規模に達していますが、このスケールメリットを活かしながら、職員はホームの中で孤立することなく、「その人らしい暮らしの場」づくりをめざしているのです。

新「けやきハイツ」が拡充され、今年10月を以って、法人の第1号のグループホーム「すすらんの家」が11年の歴史に幕を閉じます。開設以来、利用者の生活の一部始終を支えていただいた家主青柳さんや、たったひとりで始まった職員の奮闘が現在の「その人らしい暮らし」づくりにつながっています。

## ■新生けやきハイツスタート

去る10月の某日、新しく建てられたグループホーム「けやきハイツ」の引越しがおこなわれ、それまで「すすらん」に入居していた4名と旧「けやきハイツ」の入居者4名・合わせて8名が「新生けやきハイツ」での生活をスタートさせました。ここにいたる経緯は7・8合併号で紹介させていただいたとおり、大家の関口さんの厚意で、利用者が生活しやすいようにと新築してくださったものです。

今回入居から1ヶ月经った利用者さんの生活の様子と、暮らしてみても感想を取材してみました。

まず「すすらん」から引っ越してこられたTさん。ちなみにTさんはお母様も一緒に入居されています。この時はちょうど食事中でTさんがみんなの食事をテーブルに並べていました。

「きれいになったよ。部屋も何もかも。最初は馴染めるかどうか不安だったけど。すすらんも楽しかったけど、なにせ建物が古かったし、ここはきれいでしかも広くて使い

やすい。人数も多くなって賑やかで楽しいわ」

続いて旧「けやきハイツ」から移ってきたMさん。

「うてー!! ホームランだ!!」

どうやら日本シリーズ観戦に夢中でインタビューどころではない様子ですが(点数表まで作っている熱の入れようです)楽しんでいることはとても伝わってきました。



新けやきハイツの建物は廊下や脱衣所などの間取りが広く取られていて、着替えや移動の介助がしやすくなっています。またトイレが1階に3つ、2階に2つついて、どちらのトイレも洋式で段差のないつくりです。2階の廊下には4人一度に歯磨きできるような業務用シンクが取り付けられていました。こんなに広いと掃除が大変ではないかと思うのですが……。

「シルバー人材センターから週2回清掃に来てもらっているんですよ」と職員のIさんが話してくれました。「きれいで広くなったのはいいのですが何せ大人数になったものだから大変です。特にお風呂は準備できた人から次々入っていかないと、あっという間に時間がたってしまうんです。夕方の世話人は夜九時までの勤務なので、それまでに終わらせないといけない。それから宿直さんに引き継ぐんです」

なるほど、こう話している今も、Sさんが職員のNさんの介助で入浴中です。「引っ越してから今のところはトラブルなどは起こってないです。すずらんのメンバーさんも、けやきハイツのメンバーさんも仲良くやっています」とIさんは話してくれました。

ここに入居されている方は決して障がいの軽い方ばかりではなく、家から離れて暮らすことに不安があった(本人も家族も)方も多くいます。しかしGHで暮らすうちに料理ができるようになった、洗濯を自分でできたと生活する力をつけてきました。職員に体を支えられないと移動が困難なSさんも自分で大好きな目玉焼が焼けるようになりました。

けやきハイツ入居者のみなさんの暮らしぶりは、たとえ重い障がいがあっても、周囲の人の適切な支援と理解があれば親元を離れ自立して暮らせるということを示してくれている気がします。建物が変わってもそのことだけは変わらない、職員だけじゃなく近所の方、大屋さん、ボランティア、家族、いろんな人が関わって利用者さんの暮らしを見守る、それがGHなんだと思います。一方で障害のある家族を在宅で抱えて、この先どうしたらいいのかと悩んでいる方もまだまだ多い。GHでがんばって暮らしている利用者の姿がみんなの希望の星になってくれることを願ってやみません。

(星野)

